

[語用論の新しい流れ]

Istvan Kecskes* の社会認知的アプローチ (Socio-cognitive Approach to Pragmatics) について

田 中 廣 明
京都工芸繊維大学

1. はじめに

本稿では、Kecskes (2013) *Intercultural Pragmatics* (OUP)、Kecskes (2008; 2010; 2017)、Kecskes and Zhang (2009) などに基づいて、Istvan Kecskes の提唱する Socio-cognitive Approach (to pragmatics) (以下、SCA) について概観し、従来の伝統的な語用論 (Grice、(新) グライス学派、関連性理論、発話行為理論、ポライトネス理論など) とは異なる側面を見ていくこととする。Intercultural pragmatics の第一人者である Istvan Kecskes が、従来の語用論に対して問題提起をしているのは、彼の長年にわたる異文化間コミュニケーション (語用論) の研究から、以下、Kecskes (2010) の冒頭の言葉に象徴されるようなコミュニケーション観があるためである。

Communication is not as smooth a process as current pragmatic theories depict it. In Rapaport's words "We almost always fail [...]. Yet we almost always nearly succeed: This is the paradox of communication" (Rapaport 2003: 402).

彼は、このスムーズではないが、たいていの場合、成功裏に導かれるコミュニケーションの道のりを bumpy road (でこぼこ通) と表現し、コミュニケーションのプラスの側面とマイナスの側面を解明することが重要だと主張する。

Kecskes は、語用論は、協調性 (cooperation)、関連性 (relevance) と言った原理的な

* Istvan Kecskes 氏は、intercultural pragmatics の専門家で、研究対象は Socio-cognitive Approach to Pragmatics、Interculturality、Formulaic language in L1 and L2、Second language acquisition and bi- and multilingualism など。現在、New York 州立大学、Albany 校の教授 (Distinguished Professor の称号を与えられている)。American Pragmatics Association (AMPRA) 会長、Chinese as a Second Language Research (CASLAR) Association 会長。

(心理的・言語的・哲学的) 側面だけではなく、その場その場で対話の際に生じる自己中心性 (egocentrism) と書いた個人対個人の側面も考慮に入れる必要があると主張する。会話は、協調といったいわば理想的な状況だけで成り立つのではなく、試行錯誤 (trial-and-error)、試行再試行 (try-and-try-again) を通して、話し手と聞き手による共同構築 (co-construction) によって成り立つものであり、その意味では、話し手と聞き手双方のそれぞれからの視点を取り込むべきだとする。

Kecskes によれば、従来の語用論で提唱される理想主義的なコミュニケーション観や偏った文脈主義などが、成功裏に導かれるプロセスの記述に偏重する結果になってしまっており、(会話の) 停止 (breakdown)、誤解 (misunderstanding)、(対話者間の) せめぎ合い (struggle) など、マイナスの側面にも目を向けるべきであるとする。このように、コミュニケーションの齟齬を来しても、我々がスムーズに会話を進んでいけるのは、コミュニケーションが非累積的 (non-summative) (部分の総和は全体ではないこと) で創発的 (emergent) な性質を持ち、それが対話者間のやりとりの過程で達成されているためであると主張されている。ただし、当然のこととして、協調性といったプラスの側面を無視するものではなく、協調性と自己中心性¹ の双方に同等の注意を向けるべきだというのが彼の立場である。

2. 話し手の発話産出と聞き手の発話理解

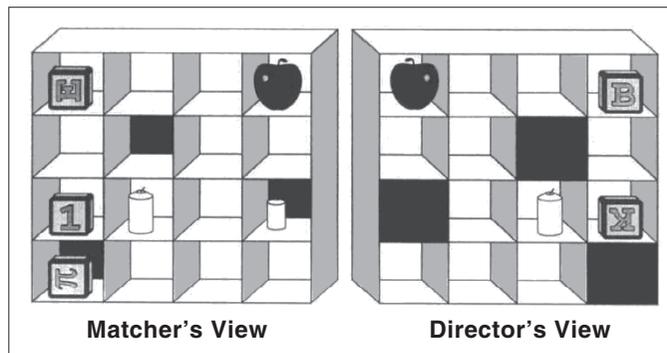
従来の (特にグライス派生の) 語用論では、話し手は聞き手の理解 (comprehension) に沿うような産出 (production) を行う。平たく言えば、聞き手に分かってもらえるように言葉を発するというコミュニケーション観が大前提であった。話し手は、聞き手デザイン (audience design) を行うことが当然だとされており、聞き手の仕事は話し手の意図を認識し、解釈することであるとされている。同様に、関連性理論でも、聞き手重視の理論を構築しているが、話し手が元から持つ意図・想定を聞き手が再構築すると考えるのが、理論の要をなしている。グライス流の話し手重視、関連性理論の聞き手重視の違いはあれ、伝達意図が伝わっていても伝わってなくても、伝わる (はずの) 意図そのものは、話し手、聞き手とも質・量が同等という立場を取る (当然、話し手が伝達意図をはっきりさ

¹ 協調性 (協調性の原理) が、相手に好意的 (agreeable) な態度を取るコミュニケーションの原理と誤解されてはならないのと同じように、自己中心性 (egocentrism) も、一般的な意味での自己中心的と混同されてはならない。日常会話では、自己中心的な態度とは、自分の意見、あるいは自分自身を第一に考えることを言う。Kecskes はこちらのほうを “egotistic” という言葉で表し区別している。ここで言う egocentrism とは、話し手・聞き手が、相互知識や共有経験よりも、自分自身の知識、以前の経験により依存してコミュニケーションを進める (主に開始時) という意味である (Kecskes 2013: 33)。

せない場合もあるが)。含意 (implicature) も含めた伝達的意味によって、話し手が何を伝えようと思っているのかは、話し手は (いわば発話の瞬間に) 本来的に、アプリアリに持つものであるというのが、従来から自明とされていた感がある。

SCA では、こうした話し手と聞き手が同程度の認知的基盤を持つ観点を疑問視し、話し手の自己中心性からコミュニケーションのプロセスを再構築している。その根底には、話し手と聞き手は、おのおのの認知的傾向 (何をどう捉えるかは異なった傾向を持つということ)、事前の経験、同じ語彙・表現を使用するにしても、それぞれの使用経験が異なることなどをあげ、いわば対話者としての個人主義観があると思われる。「話し手は自分の発話が曖昧に取られないだろうと思い (曖昧性の過小評価)、その効果は大きいと思っている (発話効果の過大評価)」(Keysar and Henly 2002) と Kecskes (2013: 33) が引用しているのも、発話初期での話し手の自己中心性を重視するからであり、話し手、聞き手とも、発話産出と理解の初期段階では、相互知識を無視し、自己知識を最大限に使用して対話を進めていく傾向があることを様々な研究者の実験結果から導き出している (Bar and Keysar 2005 など)²。まず話し手は、自己の (会話) 経験からの語彙・表現選択 (発話産出) をし、聞き手の解釈の仕方 (発話理解) は話し手の使用した語彙への聞き手自身

² Keysar たちの実験では (以下の実験図を参照)、格子状の箱が指示者用と被験者用に用意し、被験者には見えていても指示者には見えない積み木が入った格子と、両方に見えている格子を作る (他の積み木や果物が入っている格子もある)。そこで、指示者の「一番下の積み木をリンゴの下の段へ動かせ」という指示させると、被験者は、指示者からは見えないと分かっている積み木でも、自己知識をまず使用し、その積み木に 1 秒に満たない注視を行うことが多いとされる。その後、修正して、正しい (両方が見える) 積み木の方に手が行くという結果になっている。被験者に自己特権的な知識 (privileged knowledge) の使用があり (自己中心性の使用)、指示者と被験者に共有される共通知識 (common knowledge) への修正が見て取れるというわけである (共通基盤の使用と形成)。以下の実験図を参照のこと。(Keysar たちの自己中心性に関する様々な実験結果の解釈に対する批判は、Rubio-Fernández (2008) に詳しい。)



The display of objects from the participant's perspective (i.e. the matcher's) and the confederate's perspective (i.e. the director's). The critical instructions were "Put the bottom block below the apple" (from Keysar et al., 1998: 49).

の使用経験からの判断によるところが大きい。協調性、関連性、相互知識の利用が登場するのは、話し手、聞き手の自己中心性が満足（あるいは訂正）されたあとでなされるということになる。自己中心性の概念を実験的に立証した Keysar や Barr たちの議論によれば、相互知識（共通基盤）が利用されるのは、エラーの検知と修復過程においてであるとされている (Bar and Keysar 2005)。

ただし、相互知識あるいは共通基盤 (common ground) のアプリアリ性は、完全に否定されるものではなく、Kecskes and Zhang (2009) では core common ground ((話し手と聞き手が互いに存在すると想定した) 想定共有知識、アプリアリな心的表示) と emergent common ground (事後的に創発する (post factum emergence) 対話者間で共有されるリソース) が一体化して対話者間の背景的知識を作成すると考えている。

3. 文脈主義とメッセージ主義

Carston (2002: 49) が言うように、関連性理論では「言語的にコード化された意味は、それが表現する意図的命題を完全には決定しない (“... linguistically encoded meaning never fully determines the intended proposition expressed”）」という「言語的意味決定不十分性 (linguistic underdeterminacy)」が基本テーゼとされ、言語データはすべて、非言語的、さらに (言語的) 文脈情報からその解釈過程を通して拡充 (enrich) されるとする。関連性理論で言う表意 (explicature) の構築は、(i) 曖昧性除去 (disambiguation)、(ii) 飽和化 (saturation)、(iii) アド・ホック概念形成 (ad hoc concept construction)、(iv) 自由拡充 (free enrichment) の一部あるいは、いずれかを経た上で完結される。これらの過程に (いわば栄養源として) 供給しているのは文脈 (情報) と言うことになる。文脈主義によると、強い、弱い文脈主義の違いはあるにせよ、文脈という言葉は、従来から幅広くとらえられ、記号表現の解釈に影響を与えるものなら、言語的、認知的、物理的、社会的であろうと、どんなものでも含まれるとされている。例えば、ある語彙があるとすると、その語彙のどの部分を選んで活性化するかは文脈の (強い文脈主義では文脈だけの) 仕事ということになる。関連性理論ではその活性化に推論の役割を大きく認め、意味決定には、強い文脈主義が主張するような、文脈だけが決定要因となるのではなく、文脈による制約、すなわち文脈駆動 (context-driven) の語用論的制約 (処理過程) が役割を果たすと考えている。例えば、比喩解釈では、語彙表現の意味そのものが決定要因となっているのではなく、あくまで語用論的な処理過程を経ないと比喩と認識されないという立場を取る。ここには、関連性理論の意味論主義へのアンチテーゼが見て取れる。

これに対し、メッセージ主義とも言える立場では、語彙 (メッセージあるいは語彙に内在化された意味) が文脈の創作者 (creator) とされる。Kecskes は Gumperz (1982) の「発話はそれ自身でその文脈を内在して (運んで) いるか、あるいは、文脈を投射する

(“utterances somehow carry with them their own context or project that context.”) という言葉を引用してこのメッセージ主義を説明する。例えば、License and registration, please./Let me tell you something./What can I do for you?/How is it going? のような発話は、どういう場や文脈で発せられるかがすぐに分かる場合が多い。これは、我々の経験が繰り返し生じる同じような状況によって発展的に形成されており、その状況認識と我々の言語使用が密接に関連しているためである。ただし、Gumpers を再評価している Levinson (2003) は、こうした文脈オンリー主義とメッセージオンリー主義は、明確に分けられるものではないとしている。

言語産出と理解には、「文脈による可変性（文脈主義）」と「文脈から独立した規則性（メッセージ主義）」が必ず関係している。前者は文脈の「選択的な (selective)」働きに重点が置かれ、文脈は語彙やそれが活性化する意味を選択することに専念する。後者では、文脈は「構成的な (constitutive)」働きをしており、語彙選択そのものがどういう文脈を構成するかの決定に専念する。Kesckes はこうした文脈の「二面性 (double-sidedness)」を両方取り入れるとし、SCA の特徴としている。

Kesckes は、文脈主義とメッセージ主義の単純な融合には慎重な立場を取るが、Kesckes (2013) の第5章では、後者を具現する formulaic language (定型言語) を一つの章とし、後者に重点を置いた立場を取っている。さらに、定型言語が「単一文化内コミュニケーション (intracultural communication)」と「異文化間コミュニケーション (intercultural communication)」を区別する決定因子であり、文脈が定型言語の働きに主要な役割を果たすと指摘している。Kesckes (2013: 118) があげる韓国人の留学生と（アメリカの大学の）教務課の職員の間が生じた誤解の例を見てみよう。

(1) LEE: Could you sign this document for me, please?

CLERK: *Come again ...?*

LEE: Why should I come again? I am here now.

この例は、韓国人の学生が *Come again* の意味を、定型 (formula) (「もう一度 (言ってください)」) ととらずに、文字通りに (「また来い」とったところから来る誤解の例である。Kesckes (2013: 109-110) は、母語話者と非母語話者間の異文化間コミュニケーション (語用論) では、(i) このような「定型言語」の習得はかかせないが、(ii) 定型的な意味を習得する、すなわち「心理的際立ち (psychological saliency)」に達するには、単にその表現への数多い頻度での接触だけに限らず、その表現が用いられる特定の文脈での談話機能の習得が必要であると主張している。

ここで生じる問題は、なぜ、「また来い」ではなく、「もう一度」という意味が「心理的際立ち」を持つのかとすることである。

4. 「聞き手デザイン (recipient design)」と「際立ち (salience)」

従来の語用論では、話し手の産出と聞き手の理解の際に生じる「乖離」あるいは「ギャップ」(話し手はどうして聞き手の心がかかるのかという問題) に対して、Grice の協調の原理、グライス流の様々な公理、関連性の原理、発話行為理論での緒規則など、話し手と聞き手に共通する原理を仮定していた。また、近年では、会話分析や H. H. Clark たちの実験語用論からの「聞き手デザイン」を仮定することで、その差を埋めようとしている。話し手の側からは「聞き手デザイン」が行われ、聞き手の側からは、話し手が想定し、実行した「聞き手デザイン」に見合うように、話し手の意図が理解されるとするである。話し手は、相手に当然理解されるものとして、(意図を伴った) 発話を産出し、その行為を表現するために、適切な語彙を適切な文脈内で結びつけるとされる。

一方、SCA では、話し手の発話産出と聞き手の発話理解は、語彙選択や意味選択の際の「際立ち (salience)」によって影響を受けるとしている。次の例を見てみよう。

(2) Situation: A policewoman in uniform is driving the car, and the man sitting beside her is staring at her.

PW: What?

M: I was trying to picture you *without your clothes on*.

PW: Excuse me?

M: Oh no, I did not mean like that. I am trying to picture you *without your uniform*.

PW: Okay?

M: I mean, on your day off, you know, *in regular clothes*.

(映画 Angel Eyes より (Kecskes 2013: 58))

話し手と聞き手の経験値は当然違うわけであるから、語彙や意味選択をする場合に、どの部分に「際立ち」を当てて発話あるいは解釈するかは、いわば話し手(聞き手)に任されているところが大きい。(2) はかなり作りこまれた例であるが、最初から *uniform* あるいは *regular clothes* と言えば良さそうなものを、*clothes* と言ってしまったところから生じる誤解である。一つにはこの男性が女性警官をなぜじろじろ見ているのか説明をしなければならなかったこと、さらには、Kecskes が「意識下での際立ち (subconscious salience)」と呼んでいるように、意識下でこの場面で *clothes* (上位語) に *uniform* (下位語) を代用させ、際立ちを与えてしまったことが、誤解の原因となっている。この例では、女性警官が最後まで分からないようであるが、修正を加えることにより、相手の理解が得られる場合は多い。

こうした「際立ち」の部分は、発話の初頭の場面が多いとされる。話し手がもっとも

「自己中心的な」モードに入りやすい部分である。その際に、話し手と聞き手で、際立ちに差が生じるのは、前もって持つ語彙や経験の知識のどの部分に「注意 (attention)」を与えるかによるとされる。Kesckes (2010) は、注意を与えるべき際立ちは、「話し手と聞き手双方の知識基盤」、「その場の状況に関する知識の頻度や親和性」、「対話者の心理状態と (注意を受けて選択される) 項目の有用性」によって異なるとし、以下のように述べている。

Because of their different knowledge bases, the frequency/rituality of their knowledge in the situation, and the attendant attentional resources available to them for processing the salient items, the interlocutors' knowledge has different levels of salience; as a result, they conduct the attentional processing of communication in an egocentric manner.

5. 終わりに

従来の伝統的な語用論と Kesckes の言う SCA (社会認知的アプローチ) の違いを、それぞれを構成する要素からまとめると次のようになる。

	伝統的語用論	SCA
理論的背景	言語・哲学的	社会・文化・対話的
話し手／聞き手の位置	ほぼ対等	話し手重視(発話の初期段階)
意図性の扱い	意図性のみ	意図性と注意性
文脈	強い／弱い文脈主義の差	文脈主義とメッセージ主義の融合
協調性／自己中心性	協調的・聞き手デザイン	自己中心的・際立ち

このように、SCA は従来、発話の静的な側面だけしか扱ってこなかったとされる語用論に対して、動的で、柔軟な側面を扱うことができるようなアプローチとすることができる。こうした言語観は、言語人類学、会話分析、談話機能言語学といった機能主義的な言語学、また Traugott たちの文法化・構文化の研究などとも軌を一にするところが多いと思われる (鈴木・秦・横森 (編) (2017) の各章を参照のこと)。

参考文献

- Barr, Dale J. and Boaz Keysar. (2005) "Making sense of how we make sense: the Paradox of egocentrism in language use," Herbert L. Colston and Albert N. Katz (eds) *Figurative Language Comprehension*, 21-43. Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum.

- Kecskes, Istvan (2008) “Dueling context: A dynamic model of meaning,” *Journal of Pragmatics* 40(3), 385–406.
- Kecskes, Istvan (2010) “The paradox of communication: Socio-cognitive approach to pragmatics,” *Pragmatics and Society* 1(1), 50–73.
- Kecskes, Istvan (2013) *Intercultural Pragmatics*, Oxford: Oxford University Press.
- Kecskes, Istvan (2017) “The effect of salience on shaping speaker’s utterance,” *Reti, saperi, linguaggi* 6(11), 5–32.
- Kecskes, Istvan and Fenghui Zhang (2009) “Activating, seeking and creating common Ground: A socio-cognitive approach,” *Pragmatics and Cognition* 17(2), 331–355.
- Keysar, Boaz, Dale J. Barr and William S. Horton (1998) “The egocentric basis of language use: Insights from a processing approach,” *Current Directions in Psychological Science* 7(2), 46–50.
- Keysar, Boaz and Anne Henly (2002) “Speakers’ overestimation of their effectiveness,” *Psychological Science* 13, 207–212.
- Rapaport, William J. (2003) “What Did You Mean by that? Misunderstanding, negotiation, and syntactic semantics,” *Minds and Machines* 13(3), 397–427.
- Rubio-Fernández, Paula (2008) “On the automaticity of egocentricity: A review of the Egocentric Anchoring and Adjustment model of perspective taking,” *UCL Working Papers in Linguistics* 20, 247–274.
- 鈴木亮子・秦かおり・横森大輔（編）（2017）『話しことばへのアプローチ—創発的・学際的談話研究への新たなる挑戦』東京：ひつじ書房。